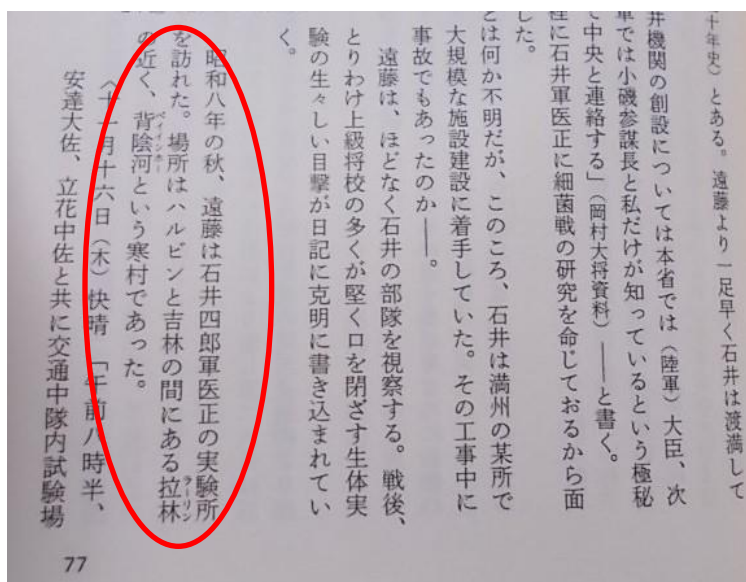
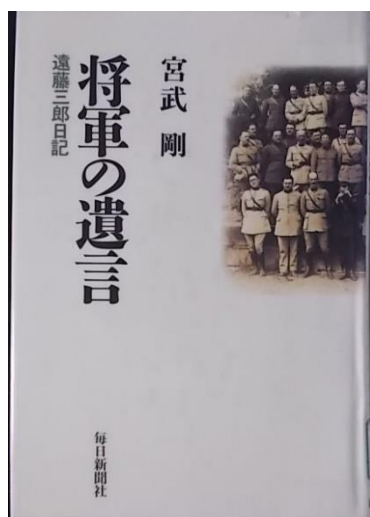


遠藤三郎の1933年11月16日の日記をめぐって 川村一之

宮武剛／著『将軍の遺言 遠藤三郎日記』（毎日新聞社 1986年04月）

「昭和八年の秋、遠藤は石井四郎軍医正の実験所を訪れた。場所はハルピンと吉林の間にある拉林の近く、**背陰河**という寒村であった。」 p77

（日記部分省略）



吉田曠二著『元陸軍中将遠藤三郎の肖像』（すずさわ書店 2012.6）

（遠藤 1933 年 11 月 16 日の日記 略）

「この記述はこの世の地獄ともいべき殺人の凄惨な光景の描写である。この**試験場（交通中隊内）**に拉致してきた人間を彼らは何度も繰り返して実験材料にし、最後に絶命するまで、その実験を中止しなかった。（中略） 遠藤はこの時期、**背陰河**にいた石井についてこう書いている。」 p296

吉中 丈志／編『七三一部隊と大学』（京都大学学術出版会 2022.4）

1 七三一部隊 悪魔の研究所,東洋のアウシュヴィッツ 中国における日本の細菌戦 1933-45 47-229

楊 彦君／著 譚汝謙／著 西里 扶甬子／監訳

「背陰河実験場-人体実験の最初の基地

石井四郎は、加茂部隊の初期の段階で、人体実験をすでに行なっていた。1933年11月16日**背陰河**を訪れた関東軍参謀遠藤三郎は、日記に以下のように記している。」 p63

（日記部分省略、p211に引用は、宮武剛『将軍の遺言-遠藤三郎日記』（毎日新聞社、1986年）77頁とある）

川村 一之／著『七三一部隊 1931-1940 「細菌戦」への道程』（不二出版 2022年12月）

補説 陸軍科学研究所が「満洲」で人体実験
浮かび上がった安達部隊の存在

李治亭／著『関東文化大辞典』（遼寧教育出版社 1993年8月）

「日本陸軍省化学実験所満洲派遣隊旧跡は四平街の迎賓街の西、地直街の東、北は四平中心医院に隣接する。もともとは東北第一交通中学校校舎で1927年に建設された」

吉中 丈志／編『七三一部隊と大学』（京都大学学術出版会 2022.4）

2 総力戦体制化と満洲国そして石井部隊 233-259

山室 信一／著 p246-249

6 満洲防疫機関と関東軍

遠藤は1932年1月20日の日記に「石井軍医正来りて細菌戦準備の必要を説明す。共鳴する点多し。速やかに実現せしむべく処置す」（注5） p247

（注5）遠藤三郎が遺した日記からの引用は、吉田曠二『元陸軍中将遠藤三郎の肖像』（すずさわ書店 2012年）、宮武剛『将軍の遺言-遠藤三郎日記』（毎日新聞社、1986年）などに依る

石井が関東軍に働きかけて東郷隊として背陰河の細菌試験所を作っていた経緯は、遠藤三郎の日記に示されている。それによれば、「正午石井軍医正に招待せられ大和ホテルに行き医師連中と会食す」（1932年9月2日），1932年9月10日 p248

「昨夜半、石井軍医正より電話あり、細菌試験ノ準備一大頓挫を来たせりとの事故、実情調査……設備の大要を見、且実情の説明を聞き、各種の障碍を打破して邁進するを可とすとの判決を与え、午后三時帰宿す」（32年10月24日） 1933年10月28日 p248

（中略）

これらの記述によれば、1932年1月には細菌試験所設置が認められ夏ごろには背陰河の施設で被験者を丸太・マルタと呼ぶ細菌戦研究が進められていたことになる。 p249

吉田曠二著『元陸軍中将遠藤三郎の肖像』（すずさわ書店 2012.6）の記述は

「この人体実験は一九三三年十一月にすでに行われていたことになる」 p296